

マラウイ共和国地図・概要



国名	マラウイ共和国 (Republic of Malawi)
面積	118,484平方Km (日本の約1/3)
人口	1756万人, 人口増加率2.9% (2018年: マラウイ国勢調査)
首都	リロングウェ (Lilongwe)
独立	1964年7月6日
言語	英語(公用語), チェワ語(国語)
政体	共和制
大統領	ラザルス・チャクウェラ

4月以降メディアに掲載されたマラウイに関する記事を2つ紹介します。当協会の草刈康子理事に関する記事については、次号以降詳しく紹介したいと考えています。

マラウイから中学教員2人採用 東京五輪で交流の群馬県太田市

群馬県太田市は10日、東京五輪の縁で交流しているアフリカ南部のマラウイから教員2人が来ることを明らかにした。清水聖義市長が派遣を要請していた。英語の授業などの教員として採用し、来年4月から市内の中学校で教えられるように準備を進める。

来日を予定するのは、マラウイの中学校の女性と男性の教員。女性は熊本大学で学んだ経験もあるという。同国は英語を公用語としている。外国語指導助手(ALT)ではなく、教員として授業ができるように臨時の地方公務員として採用したいという。

太田市は東京五輪でマラウイ選手の合宿を受け入れた。今年1月に同国で大規模な洪水被害が発生すると、市や市民らは義援金や食料、衣類などを集めて贈る支援活動をした(以下略)。

(6月11日付け朝日新聞)

【訃報】今井一郎関学大教授 マラウイで事故死 8月、マラウイ湖で調査中

関西学院大学総合政策学部(兵庫県三田市)の今井一郎教授が8月、アフリカ・マラウイで研究調査中にボート転覆事故に巻き込まれたとの現地報道に関し、関学大は2日、亡くなったのは今井教授と事実確認ができたと発表した。68歳だった。

今井教授が提出した海外出張申請によると「マラウイでの漁労活動に関する文化人類学的調査」のために渡航していたという。19日に強風で船が転覆した。

今井教授の専門は生態人類学。1988年に京都大で博士課程を修了し、2000年から関学大総合政策学部の教授を務めた。

関学大は、学長、学部長の連名でコメントを発表。今井教授が、発展途上地域における開発と環境保全の矛盾構造の解消につながる成果を発表したことなどを紹介し「心より感謝を申し上げますとともに、ご冥福をお祈りいたします」とした。

(9月3日付け神戸新聞)

日本マラウイ協会 入会ならびに年会費納入のお願い



日本マラウイ協会

当会は、両国間の理解を深め、文化、スポーツ、経済、科学技術等の協力を通じ、相互の繁栄に寄与することを目的として1983年2月26日設立した任意団体です。会員が納入する会費で運営を行っています。ご入会、会費納入をお願いいたします。

Homepage www.japan-malawi.org
Email info@japan-malawi.org
Facebook facebook.com/japan.malawi
Twitter twitter.com/JpMalawi
YouTube Malawi Society of Japan

区分	入会金	年会費	備考
正会員	1,000円	3,000円	
賛助会員	0円	1,000円	郵便物送料無し
団体会員	3,000円	10,000円	公的・非営利団体
法人会員	10,000円	30,000円	協賛企業

支払方法	口座情報等
銀行振込	三菱UFJ銀行 東恵比寿支店(普)0255739 日本マラウイ協会事務局
郵便振替	ゆうちょ銀行 〇一九店(ゼロイチキユウ店) (当)0013125 日本マラウイ協会 ゆうちょ銀行送金: 口座番号00190-7-13125
PayPal	ホムム〜ジ「募集」ホム〜ジ下部(Card払可)

※会費適用期間: 4月1日から翌年3月31日まで



日本マラウイ協会

日本マラウイ協会

機関紙(年2回発行)

KWACHA

http://www.japan-malawi.org info@japan-malawi.org

第67号

2022年
10月1日発行



アフリカを語る集い2022

日時: 2022年7月16日(土) 10:00~18:00

会場(配信拠点): JICA地球ひろば(東京都新宿区)

特集号

日本マラウイ協会は7月16日、東京・市ヶ谷のJICA地球ひろばをメイン会場にリアルとオンラインのハイブリッドで「アフリカを語る集い2022」を開きました。今号では、この集いを特集します。



人づくり、国づくりに支援継続を

UNDP(国連開発計画) マラウイ常駐代表 小松原 茂樹氏(集い基調講演者)



2019年末からのコロナ危機は、世界的な気候変動や異常気象、ウクライナ紛争や先進国の金融政策の転換などと相まって、世界経済に深刻な影響を及ぼしています。多くの低開発国で経済が停滞、財政が悪化する一方でODAは伸びず、海外出稼ぎ者からの送金や海外からの投資、金融も減り、国際的な開発はこれまでにない危機に直面しています。

UNDPが毎年発表している人間開発指数も、史上初めて後退し、世界的な危機が人類全体の福祉に深刻な影響を及ぼしていることを印象付けました。特に従来から政治、経済、社会などの分野で脆弱性を抱えてきた国・地域では、不透明さが増しています。その一方で、危機は新たな可能性を拓くチャンスでもあります。コロナ危機では、デジタル技術の活用が進み、情報、金融サービス、電子商取引などの分野で、企業・起業家が新たなビジネスや雇用を生み出しています。待ったなしの地球環境問題も、さまざまなイノベーションと国際協力を促しました。国際的な環境が大きく変わる中で2021年に誕生し

たアフリカ大陸自由貿易圏(AfCFTA)は、経済発展の加速と深化に向けたアフリカの決意を表しています。さらにアフリカは域外の発展途上国とも結びつきを強化しています。製薬、ワクチン、IT、インフラ、貿易・投資、デジタル技術など、多くの分野でアジアとアフリカは関係を深めながら成長しています。国際的な環境が大きく変化する中で、弱点や困難を減らそうとしても、新たな発展やチャンスに繋がるわけではありません。成長の可能性がある分野や人材に投資し、長所を伸ばすことで弱点を克服する、将来を見据えた支援が求められています。8月27-28日に日本政府、国連、UNDP、世界銀行、AUCの共催によりチュニジアで開催された第8回アフリカ開発会議(TICAD8)でも、人材投資の重要性が強調されました。青年海外協力隊の累積派遣者数でマラウイが世界一であることからわかるように、マラウイと日本の間には長く深い交流の歴史があり、コミュニティから政権幹部に至るまで、日本の支援で育った多くの人々が活躍しています。「現在窮乏、将来有望」の精神で、マラウイの人づくりと国づくりに、皆様のご支援を引き続きお願い申し上げます。



集いは、日英同時通訳付きでネット経由で世界へ発信されました。また、NHK国際放送(スワヒリ語ラジオ十数分×4回放送 8/3, 4, 10, 11)でも紹介されました(右)。

全セッション開催報告

草の根協働をテーマに集い
今後も相互理解深化へ



アフリカを語る集い2022

日時：2022年7月16日（土）10:00～18:00
会場（配信拠点）：JICA地球ひろば（東京都新宿区）
<https://japan-africa.online/2022/>

主催	日本マラウイ協会
共催	公益社団法人青年海外協力協会
協賛	タカオカエンジニアリング株式会社
後援	外務省、独立行政法人国際協力機構、JICA地球ひろば、一般社団法人アフリカ協会、一般社団法人アフリカ開発協会、特定非営利活動法人アフリカ日本協議会、協力隊を育てる会、駐日マラウイ共和国大使館

1. 開会・基調講演

TICAD8の開催国の大使らが登壇

アフリカ開発会議(TICAD8)のチュニジア開催に合わせ日本とアフリカとの有意義な交流の場を設ける事を目的として、「草の根協働」をテーマに、JICA地球広場を中心にオンラインも使って「アフリカを語る集い」を開催しました。

開催に当たっては、青年海外協力協会の共催、マラウイ大使館、外務省、JICA、日本アフリカ協会他多くの後援を頂きました。

第一セッションでは青年海外協力協会の上田常務理事の共催者挨拶、エルミ駐日チュニジア大使、チンザ駐日マラウイ大使、宮下外務省TICAD大使、小林JICA青年海外協力隊事務局長からご挨拶の後、小松原UNDPマラウイ常駐代表による、基調講演では、マラウイについての包括的な分析、課題、マラウイだけでなくアフリカの多くに国にも共有可能な今後の開発の新たな可能性、TICADへの期待など、極めて示唆に富むお話を頂きました。

(日本マラウイ協会会長 西岡周一郎)



開会セッション（JICA地球ひろば 国際会議場）



【主催・共催・来賓】左から 柳沢香枝・副会長、上田 繁・青年海外協力協会常務理事、Mohamed ELLOUMI・駐日チュニジア大使、Kwacha CHISIZA・駐日マラウイ大使、西岡 周一郎・日マ協会会長、宮下 匡之・外務省TICAD大使、小林 広幸・青年海外協力隊事務局長

2.1 医療・教育・地球環境

最新の取り組みを4人が報告

The Warm Heart of Africaと呼ばれるマラウイ共和国。私がこの美しい国に青年海外協力隊の外科医師として降り立ったのが1995年。HIVエイズが猛威を振るっており、派遣先の国立ゾンバ中央病院は「野戦病院」を髣髴とする状況の中で、昼夜を問わず診療にあたっていました。発見、驚嘆、挑戦の毎日。その後の人生においてもあの時ほど仕事に没頭したことはありません。あれから27年。マラウイの現地や周囲の国々からの最新報告を楽しみにしながら、司会進行させていただきました。

一人目は、NPO法人AfriMedicoの石毛しいなさん。日本の伝統的な配置薬に注目した元ニジェール隊員の町井恵理代表。マラウイ隣国のタンザニアにおいて、200軒を超える世帯に「置き薬」を配置し、先用後利という配置薬の利点を生かした疾病の早期対処などの幅広い健康教育効果が期待されています。置き薬システムのデジタル化にも取り組み、2030年までには10万世帯、50万人が「セルフメディケーション」が可能な状況を目指して活動を展開しています。

二人目は、NPO法人TICO代表で元マラウイ協力隊員の吉田修さん。マラウイ隣国のザンビアにおいて、心臓血管外科手術技術移転事業を行い、ザンビアで初めてとなる人工心肺用いた心臓手術を成功させ、現地の医師自身が心臓手術ができることを目標にザンビア大学と連携しながら活動を展開しています。また環境保全型の農業支援にも力を入れており、果樹栽培や養蜂を取り入れたアグロフォレストリーの紹介がありました。

三人目は、NPO法人CanDo代表の永岡宏昌さん。マラウイのパロンベ県における保護者参加による初等学校教室建設に取り組みについて、チーフと村人の協働を促す外部者の役割の重要性について報告がありました。行政官でもある伝統酋長への敬意を基調に、学校会議や保護者会議、建築リーダーの育成、さらには学校保健リーダーの育成に取り組む事例紹介がありました。

四人目は、ザラニヤマ環境財団のレオナード・セフ氏と日本工営株式会社の櫻井彰人さん。JICAザラニヤマ流域保全プロジェクトでは、森林資源の環境保全と人間社会の資源利用において、特に養蜂をはじめとする現地特産品による収入向上活動を通じた持続可能な環境保全マネージメントが紹介されました。

(東京女子医科大学 客員教授、
屋久島尾之間診療所 理事長 杉下智彦氏)

2.2 起業家

若手起業家3人が報告 持続可能性への質問も

起業家セッションでは、3人の若手起業家からの発表がありました。ウガンダ南西部のキソロ県で「天地の宮（Awa no Miya）」を立ち上げた高須多明さんからは、美しい自然の映像とともに、自然と調和した村を作るための7つの理想と、その理想を実現するためのコミュニティリゾート建設の計画が紹介されました。タンザニアでWATATU株式会社を設立した岡本龍太さんからは、JICA海外協力隊員時代の経験を元に、資材の提供から販売まで農業生産の全てを支援するJUMLA（スワヒリ語で「全て」）事業が紹介されました。同じく元JICA海外協力隊員の小栗彩子さんからはマラウイでのソーシャルビジネス、SINTHANITSAの紹介がありました。現金収入が乏しい小規模農家を対象に、携帯電話を提供や、バートトラックを用いた農産物と農村にない物資の物々交換、農産加工などを進める計画だということです。フロアからは、こうした取り組みを持続的なものにするための工夫などについての質問がありました。

(日本マラウイ協会副会長 柳沢香枝)

2.3 産業・貿易

アフリカの課題に挑戦する3人が報告

STANDAGEの大森健太さんには、日本とアフリカ間の貿易に関する多岐にわたる課題をデジタルを活用して解決・支援する新しいスタイルの貿易商社についてお話を頂きました。

タカオカエンジニアリングの市川昭彦さんからは、電力分野の総合ソリューションプロバイダーとして、アフリカの電力インフラを発電・送電・配電と一貫して計画的に整備する事の重要性、その為には国際協力が大きく寄与する事、多国籍に渡るパートナーとの協働、技術・経験・ノウハウのアフリカへの移転・共有への配慮が必要との指摘がありました。

EastAfrica Sales Promotionの金城拓真さんからは、アフリカ10か国に及び豊富な貿易・ビジネス経験によるノウハウや視点を語って頂きました。各国の法律・ルール改正など、色々な問題がある事を前向きに捉えて解決方法を考え諦めずに取り組む事の大切さを強調頂きました。

皆様の示唆に富むプレゼンテーション、アフリカの課題に果敢に挑戦なさっている意欲と情熱は大変刺激的で、これからの大いに期待をしたいと思います。

(日本マラウイ協会会長 西岡周一郎)

3. 座談会

4グループで討論 対話で新たな可能性と繋がりを

第3部では「スポーツ/食」「ライフワーク/キャリア」「国際結婚/パートナー」「日本での学び」という4つグループに分かれ、座談会セッションが行われました。それぞれ専門的な活動についての話が繰り広げられた第1部と第2部を受け、参加者自らが深堀りしたいテーマを選び、自由にグループ内で議論を繰り広げるという時間です。それぞれのグループのファシリテーターはアフリカにパートナーがいたり、アフリカにルーツを持ちつつ日本で学んでいたりと、それぞれに共有テーマを持っており、参加者も質問やコメントなどを通して、有意義な学びの時間を過ごしていた様子でした。特に「日本での学び」というグループでは、アフリカと日本の意外な共通点、伝統や学問に対する向き合い方など、対話を通してお互いの国の理解を深めていました。今後は、参加者が得た関心をさらに次の機会につなげることができるような場作りが期待されます。

(日本マラウイ協会理事 椎木 睦美)

音楽ステージ

アニャンゴさんによる演奏・歌唱

東アフリカ西部に住むルオ族の伝統楽器ニャティティを女性として世界で初めて演奏許可を得たアニャンゴさん（Anyango。午前中に生まれた女の子の意味、本名：向山恵理子）による演奏、歌唱、そして語りで作る魅力的なステージに、感動の拍手が鳴りやまないエンディングでした。



【音楽ステージ】アニャンゴ



主催・共催・司会・運営スタッフとアニャンゴの記念写真